みやこの近代 77

高木　博志

明治維新と賀茂祭 ㊤

宮中行事と切れた「神社の祭り」へ

毎年、五月十五日には賀茂祭（葵祭）がとりおこなわれる。勅使の近衛使をはじめ、舞人、牛車、斎王代と華やかな行列が、京都御所から下上社へと、向かう。

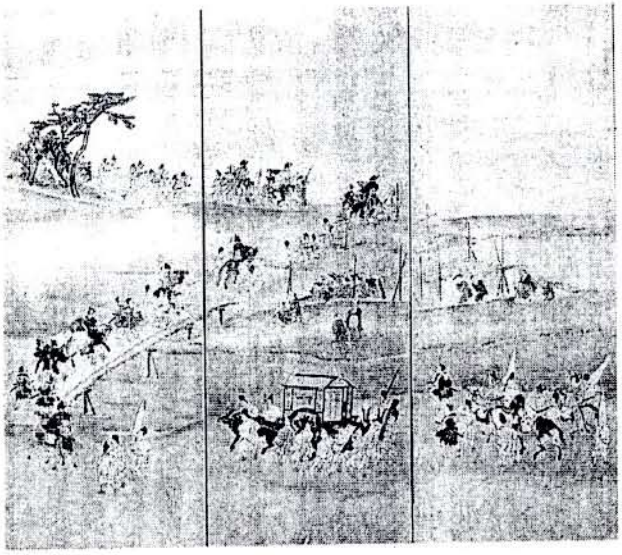
「平安絵巻」のようなとたとえられる賀茂祭も、実は古代・中世、近世、明治維新、そして戦後と大きな変貌を遂げてきた。近現代の賀茂祭の大きな特色は、基本的に東京の皇室と関係のない、「神社の祭り」であることだ。

平安時代や元禄に復興されて以降の賀茂祭は、「朝廷の祭り」として行われた。「朝廷の祭り」では、宮中の年中行事に組み込まれ、清涼殿の天皇の眼前で、飾馬の出で立ちや求子の舞がおこなわれ、神への祭文や幣物が託される発遣の儀があった。そして路頭の儀、賀茂社での社頭の儀へと、儀式は流れる。このように「朝廷の祭り」として勅使が派遣された重要な平安京の祭には、賀茂祭、石清水放生会、春日祭があった。しかし現代、賀茂祭に連動した宮中の儀式が、東京の皇居でおこなわれるわけではない。

それでは賀茂祭の変化を、皇室のあり方の変容とともに歴史的にあとづけたい。

奈良時代には賀茂県主の氏神祭祀の賀茂祭がおこなわれ、奈良から見物人も来た。平安遷都後の九世紀になると、天皇の皇女が賀茂の神に奉仕する斎院制度と勅使派遣がはじまり、「朝廷の祭り」としての賀茂祭が成立する。平安時代に「まつり」といえば、公達が華やかに行列する賀茂祭であった。しかし斎院制度も十三世紀に廃絶し、応仁の乱後、文亀二（一五〇二）年に天皇権の衰微とともに、賀茂祭は中絶する。石清水放生会や大嘗祭とともに、平安時代以来の朝儀のあり方が断絶する。

勅祭の賀茂祭は元禄七（一六九四）年に復興することとなる。その背景には五代綱吉の時代に「武断政治」から「文治政治」へと転換し、朝廷の文化や儀礼を幕藩制の中に生かしていこうとする政策があった。十六世紀に焼け落ちた東大寺大仏殿が再建されたり、大嘗祭や石清水放生会が復興するのもこの時期である。賀茂社の側からは、上社・梅辻職久、下社・梨木祐之らによる朝廷・幕府への働きかけもあった。こうして、四月、中酉日に行われる賀茂祭が、「朝廷の祭り」として「宮中の儀―路頭の儀―社頭の儀」の流れのなかで、ふたたび復活する。



西村楠亭「葵祭図屏風」左隻（國學院大学神道資料館所蔵、部分）

江戸後期の西村楠亭作「葵祭図屏風」には、河原の席で路頭の儀を見物する庶民が描かれる。また寛政六（一七九四）年に刊行されたガイドブックの『賀茂祭』などには、路頭の儀がはじまる御所の東の清和院口や賀茂社への道中が、鑑賞すべきスポットであると紹介される。すでに観光の要素が看取できる。嘉永期以降になると、孝明天皇の伊勢神宮・賀茂社・石清水八幡宮への三社奉幣が盛んになり、文久三（一八六三）年には賀茂社行幸がおこなわれ、賀茂社の地位が浮上する。

しかし慶応四（一八六八）年三月の神仏分離令をうけて、賀茂別雷社でいえば、近世まで神宮寺（本尊十一面観音）・経所・経蔵・多宝塔などがあった景観は一変し、社僧、供僧は一掃される。明治四年正月には、社寺領の朱印地除地の上知が決まり、古代以来の賀茂の神領（二千五百七十二石）とのつながりも希薄化してゆく。そして、明治五年正月の世襲社家の廃止により、内務省より派遣された神官へと担い手がかわってゆく。

（京都大学助教授・日本近代史）

たかぎ・ひろし氏　1959年大阪府生まれ。立命館大学大学院博士課程修了。著書に『近代天皇制の文化史的研究』など。